あとがき

筆者がオーストラリアで調査を始めて約15年が経とうとしている。現在の職を得てからは以前ほど長期の調査を行うことはかなわなくなったが、ほぼ毎年調査地に赴いてきた。その間、オーストラリアでは新自由主義的政策がますます強化され、筆者と関わりのある先住民の人々の生活状況は厳しさを増したように見受けられた。特に先住民の中でも福祉給付金を受給する人々のもとには、福祉事務所から面談や職業訓練への参加を求める電話が頻繁にかかり、近所の通りを歩いているだけで警察に尾行されるなど、政府当局からの監視が明らかに強化されたように感じられた。そしてこのような状況は先住民だけに当てはまるものではなく、「不利な立場に置かれた地域」やそれに準ずる地域に居住するアフリカ人難民や白人も類似の状況にあった。

同時にこの間、世界では新型コロナウィルス感染症の流行といった既存の秩序や常識を揺るがすような重大な出来事があり、それは現地の人々や筆者にも影響を及ぼすことになった。しかし、様々な困難が降りかかってくるたびに、人々はそのような状況に甘んじることなく、独自の方法で対応していた。彼・彼女らが既存の制度やルールに対峙するとき、それまでは直接関わりのなかった人々との間に人種やエスニシティといった差異を超えた連帯が起こることもあった。そのような連帯は、未曾有のコロナ禍の中で起こったBLMにおいて具現化したといえる。また、コロナ禍はそれまで現地でのフィールドワークを前提に研究を行ってきた一人類学徒としての筆者にとっても自分の研究手法を問い直す恰好の機会となった。本書はそのような変化を契機としてでき上がったものでもある。

本書を執筆するにあたり、多くの方々のお世話になった。まず、オーストラリアでの現地調査やオンラインによる聞き取り調査に協力してくださった全ての方々にお礼申し上げたい。とりわけ、筆者が大学院生の頃から家族の一員として受け入れてくれているブロディ家のみなさんには改めて感謝したい。この家族との出会いがなければ、先住民研究を続けることはできなかっただろう。

また、筆者とアフリカ人難民を引き合わせてくださった教会関係者の方々や南スーダン・コミュニティおよびブルンディ・コミュニティのリーダーの方々、筆者からの幾度にもわたるインタビューに快く応じてくださった白人市民グループのみなさんにも心からお礼申し上げます。とりわけ、M. ブロディ氏とG. エイコン氏からは本書の執筆にあたり、有益なご助言をいただいた。

大学院時代の指導教授として私を導いてくださった須藤健一先生、窪田幸子先生（現・芦屋大学）、前の勤務先である広島大学の髙谷紀夫先生、長坂格先生から教わった人類学的思考や研究手法は現在でも筆者の研究の土台となっている。深く感謝したい。

『オーストラリア多文化社会論――移民・難民・先住民族との共生をめざして』（2020）の共編者である関根政美先生（慶應義塾大学）、塩原良和先生（慶應義塾大学）、藤田智子先生（九州大学）には本書を書くきっかけを与えていただいた。

また、丹羽典生先生（国立民族学博物館）、ならびに塩原先生、杉田弘也先生（神奈川大学）には本書の執筆にあたり貴重なご助言をいただいた。

国立民族学博物館での共同研究（若手）「先住民と情報化する社会の関わり」（代表：近藤祉秋先生）のメンバーのみなさんにはネトノグラフィーやデジタル民族誌といった新たな研究手法を考える中で大きなヒントをいただいた。

本書の編集を担当してくださった法律文化社の舟木和久さんに深謝したい。舟木さんには前掲書『オーストラリア多文化社会論』でもお世話になったが、今回も本書刊行にあたり随所で適切なアドバイスをいただいた。

本書は筆者が行ってきた研究をもとにしたものだが、執筆にあたっては、科学研究費補助金（若手研究 B、課題番号26770300）、（若手研究、課題番号 19K13460）の助成を受けた。記して御礼申し上げたい。また、本書の出版にあたり、豪日交流基金からの寛大な助成を受けた。心よりお礼申し上げます。

最後にいつまで経っても一所にとどまることなく、様々な地を渡り歩く筆者をいつも見守ってくれる夫と家族に感謝したい。

2023年 2 月 3 日

栗田梨津子